

オセアニア[NZ]



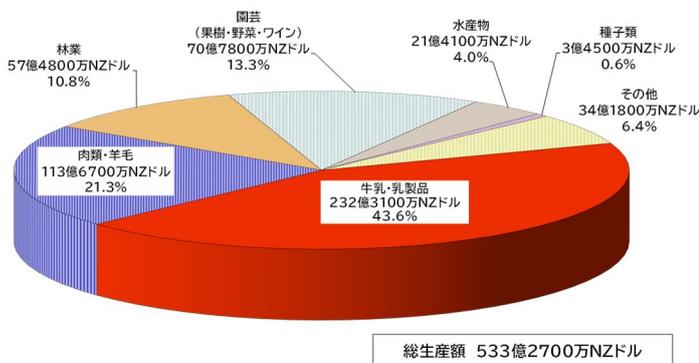
1 農・畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、国土面積（2680万ヘクタール）の4割強に当たる1126万ヘクタールが農地となる農業国である。また、人口は533万人（2025年9月末時点：推計値）と、農業生産に対して国内の市場規模が小さいため、農畜産業は輸出に依存する割合が高くなっている。

このうち、畜産部門は、農畜産物輸出額の6割以上を占め、特に牛乳・乳製品は4割以上を占めるなど基幹部門となっている。

2023/24年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額は、533億2700万NZドル（前年度比7.2%減）とかなりの程度減少した（図1）。

図1 農畜産物輸出額（2023/24年度）



資料：NZ一次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」

注：年度は7月～翌6月。

このうち、牛乳・乳製品は、チーズなどの高付加価値商品の輸出量が減少したことで、232億3100万NZドル（同10.7%減）とかなりの程度減少した。また、肉類・羊毛については、世界的な生活費高騰による家計への圧迫により消費者がより安価な肉に切り替えたことなどから、113億6700万NZドル（同6.5%減）とかなりの程度減少した。果樹・野菜は、天候不良の影響を受けリンゴなどの一部の作物の収穫量は減少したものの、世界的な需要に支えられ、全体としては、70億7800万NZドル（同0.1%減）と前年並みとなった。



写真1 量販店販売状況(北島:オークランド)

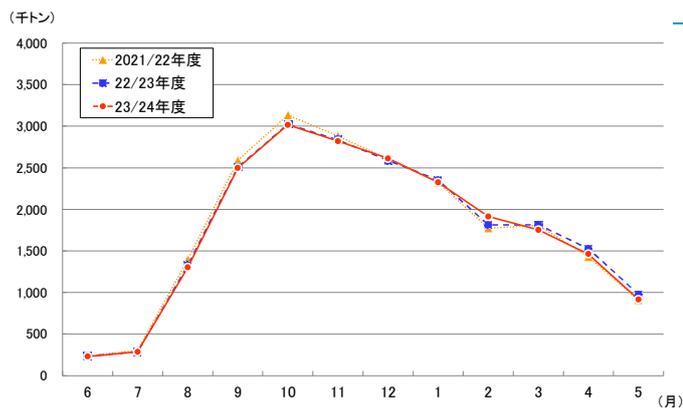
2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動している。一般的には早春の8月頃に搾乳を開始し、

10月から初夏となる12月に生乳生産の最盛期を迎え、冬となる翌年6～7月頃にはほとんどの搾乳牛が乾乳し、分娩に備えるという、明確な季節型の生産体系となっている（図2）。そのため、生乳生産の中心となる9月～翌2月の半年間で、年間生産量の約7割を生産する。

図2 生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand
注：年度は6月～翌5月。

NZの生乳生産量は全世界の約3%に過ぎないが、その9割以上が輸出に仕向けられるため、世界最大の乳製品輸出国となっている。特に全粉乳については、国際市場における貿易量の約6割を占めている。しかし、国内市場の規模が小さいため、生産者支払乳価や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい特徴を有している。

ア 主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。2001年9月まで、ニュージーランド・デイリーボード(NZDB)が乳製品の一輸出機能を有していたが、酪農産業の再編が行われ、同年10月、当時の2大酪農協であったキウイおよびNZデイリー・グループにNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協(乳業も兼ねる)であるフォンテラが誕生した。

フォンテラ(当時の国内集乳量の割合は96%)の誕生に合わせて、01年に生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法(Dairy Industry Restructuring Act 2001)が成立した。同法では、フォンテラの独占による弊害を回避するため、乳業の新規参入機会の付与などが盛り込まれたほか、集乳の義務や他の乳業会社の求めに応じた一定量の生乳供給が義務付けられていた。しかし、この20年間でフォンテラの集乳量の割合が約8割程度にまで低下していることを背景に、20年7月、一定条件の下で集乳の義務を免除するなどの法改正が行われ、23年6月から施行された。

イ 生乳の生産動向

搾乳牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加、さらに、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換などを受け、増加傾向で推移してきた。しかし、2015/16年度からは、乳製品国際価格の低迷に伴い淘汰が進んだことで、搾乳牛飼養頭数は2年連続で減少した(図3)。17/18年度には乳製品国際価格が回復したことで増加に転じたものの、18/19年度に再び減少に転じた。以降、同国の搾乳牛飼養頭数は、飼養戸数の減少などを背景に減少していたが、23/24年度は470万1596頭(前年度比0.6%増)とわずかに増加した。

図3 生乳生産量と搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
注1：年度は6月～翌5月。
注2：搾乳牛飼養頭数は、各年12月末時点。

また、NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域を中心に行われてきた。しかし、近年は、人口が少なく草地面積が確保できる南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されたことから、南島の飼養頭数が拡大しており、両島の差は縮小傾向にある。23/24年度の搾乳牛飼養頭数は、従来からの主産地である北島が268万4000頭(同0.0%増)と前年並みとなった。一方で、新興の酪農生産地である南島が201万8000頭(同1.3%増)と前年度からわずかに増加した(表1)。

表1 島別の搾乳牛飼養頭数・飼養戸数・1戸当たり飼養頭数の推移と1頭当たりの生乳生産量の推移

表1 地域別の搾乳牛飼養戸数・頭数・規模の推移と1頭当たりの生乳生産量

| 地域・区分／年度 | | 2019/20 | 20/21 | 21/22 | 22/23 | 23/24 |
|----------|-------------------|---------|--------|--------|--------|--------|
| 北島 | 飼養頭数(千頭) | 2,857 | 2,839 | 2,793 | 2,683 | 2,684 |
| | 飼養戸数(戸) | 7,979 | 7,845 | 7,632 | 7,444 | 7,351 |
| | 1戸当たり飼養頭数(頭) | 358 | 362 | 366 | 432 | 365 |
| 南島 | 飼養頭数(千頭) | 2,064 | 2,065 | 2,049 | 1,992 | 2,018 |
| | 飼養戸数(戸) | 3,200 | 3,189 | 3,164 | 3,157 | 3,134 |
| | 1戸当たり飼養頭数(頭) | 645 | 647 | 647 | 587 | 644 |
| 合計 | 飼養頭数(千頭) | 4,922 | 4,904 | 4,842 | 4,675 | 4,702 |
| | 飼養戸数(戸) | 11,179 | 11,034 | 10,796 | 10,601 | 10,485 |
| | 1戸当たり飼養頭数(頭) | 440 | 444 | 449 | 441 | 448 |
| | 1頭当たりの生乳生産量(リットル) | 4,296 | 4,426 | 4,291 | 4,428 | 4,369 |

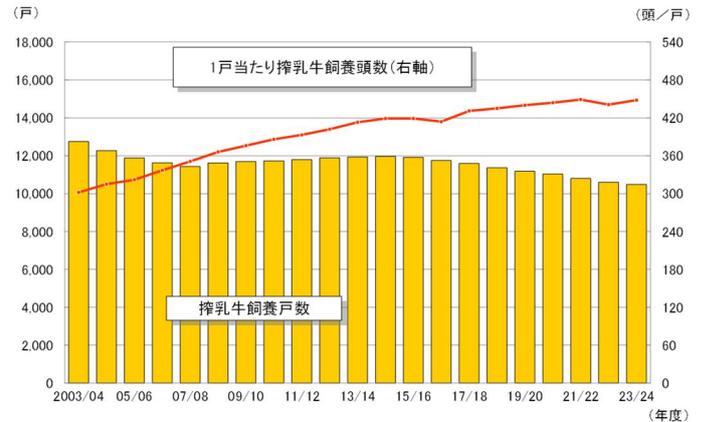
資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
 注1：各年12月末時点。
 注2：搾乳牛の頭数および戸数。

生乳生産量の長期的な推移を見ると、14/15年度までは搾乳牛頭数の増加に加え、補助飼料の給餌量増加を受けて1頭当たり乳量が増加したことなどから、右肩上がりでも推移してきた(図3)。しかし、乳製品国際相場の低迷を受けて、生産者支払乳価が引き下げられたことで生産者の生産意欲が減退し、搾乳牛頭数が減少したことなどから、15/16年度から2年連続で前年度を下回った。18/19年度は春先の気候に恵まれて、牧草地の生育が良好であったことから生乳生産量は増加した。また、20/21年度は、好天に恵まれ、牧草の生育が良好であったことなどから、2170万5000キロリットルと過去最高を記録した。一方、23/24年度は、乾燥した気候による牧草の生育不足の影響から2054万1000キロリットル(同0.8%減)とわずかに減少した。

搾乳牛飼養戸数は、07年に乳製品国際価格が高騰して以降、14/15年度まで8年連続で増加したが、15/16年度以降は減少傾向に転じている。23/24年度は1万485戸(同1.1%減)と9年連続の減少となった(図4)。

1戸当たり搾乳牛飼養頭数は、酪農家の規模拡大に伴い、これまで一貫して増加してきた。16/17年度には生産者支払乳価の低迷などを背景に減少したものの、17/18年度以降は再び増加傾向で推移し、23/24年度は448頭(同1.6%増)となった。

図4 搾乳牛飼養戸数と1戸当たり搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
 注：各年12月末時点。



写真2 かんがい酪農の風景(南島:カンタベリー地方)

ウ 牛乳・乳製品の需給動向

NZの乳製品輸出先は、中国をはじめ、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界130の国や地域に及んでいる。

2023/24年度(7月～翌6月)の乳製品主要4品目(全粉乳、バター、脱脂粉乳、チーズ)の輸出量は、263万9000トン(前年度比0.6%減)とわずかに減少した(表2)。品目別に見ると、全粉乳は、主要輸出先であるマレーシア向けが増加し、全体では140万7000トン(同2.4%増)とわずかに増加した。脱脂粉乳は、主要輸出先であるアラブ首長国連邦向けが増加し、全体では44万1000トン(同1.1%増)とわずかに増加した。一方、バターは、主要輸出先である中国向けに加えて豪州向けが減少し、全体では43万

8000トン(同7.3%減)とかなりの程度減少した。チーズは主要輸出先である中国や日本向けが、いずれも減少し、全体では35万3000トン(同5.4%減)とやや減少した。

表2 搾乳牛飼養頭数、生乳生産量および乳製品輸出量の推移

(単位:千頭、千キロリットル、千トン)

| 区分/年度 | 2019/20 | 20/21 | 21/22 | 22/23 | 23/24 | |
|---------|---------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 搾乳牛飼養頭数 | 4,922 | 4,904 | 4,842 | 4,675 | 4,702 | |
| 生乳生産量 | 21,145 | 21,705 | 20,776 | 20,702 | 20,541 | |
| 輸出量 | 全粉乳 | 1,497 | 1,640 | 1,407 | 1,374 | 1,407 |
| | バター | 438 | 416 | 394 | 473 | 438 |
| | 脱脂粉乳 | 374 | 328 | 329 | 436 | 441 |
| | チーズ | 323 | 360 | 332 | 373 | 353 |
| | 合計 | 2,632 | 2,744 | 2,462 | 2,656 | 2,639 |

資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics NZ
 注1: 経産牛飼養頭数は12月末時点、単位は千頭。
 注2: 生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。
 注3: 乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

エ 生産者乳価と生産コストの動向

同国の生産者乳価は、国内の乳製品市場が小さく輸出依存度が高いことから、国際的な価格動向や為替相場の動向などに左右される傾向にある。

2023/24年度(6月～翌5月)の生産者支払乳価(平均支払乳価)は、生乳の固形分^(注2)1キログラム当たり8.90NZドル(前年度比1.6%増)となった(図5)。

生産コストは、14/15年度および15/16年度は、乳価の低迷により、生産者が補助飼料の給餌やかんがい施設への投資などを抑制したことから低下した。2000年代後半に入り、乳価の上昇に伴い生産者の生乳増産意欲が高まり、放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農でも補助飼料の給餌量が増加したことに加え、インフレ圧力による飼料費や肥料費、燃料費などの高騰を受けて、微増傾向で推移している。23/24年度の生乳の固形分1キログラム当たりの同コストは5.45NZドル(同5.2%減)とやや減少した。

(注2) 乳脂肪分および乳たんぱく質。

図5 生産者乳価と生産コストの推移



資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、 「Economic Survey」
 注1: 年度は6月～翌5月。
 注2: 生乳の固形分ベース。

(2) 肉牛・牛肉産業

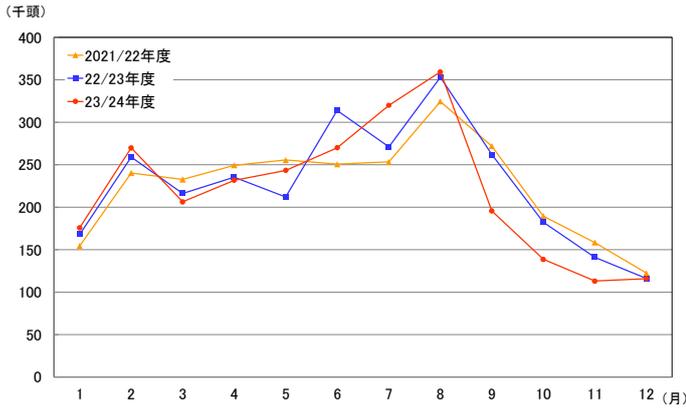
NZの肉用牛生産は、酪農と同じく放牧(草地)に依存した生産体系となっており、フィードロットなど穀物肥育による生産は、ごくわずかである。また、酪農部門からの牛の供給が多いことで、牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることが、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。



写真2 肉牛の放牧風景(南島:カンタベリー地方)

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、肉用牛のと畜頭数は牧草の生育が良好な春(9～11月)を過ぎた夏(12月～翌2月)ごろから増加し、冬(6～8月)ごろにピークを迎えた後、また春にかけて減少する(図6)。また、と畜頭数全体の4割程度を占める経産牛は、大部分が乳用経産牛由来であり、酪農の乾乳期となる6月を前に乳用牛の更新が行われることから、例年4～5月に経産牛のと畜頭数が集中する。

図6 成牛と畜頭数の推移



資料：Statistics NZ
注：年度は10月～翌9月。

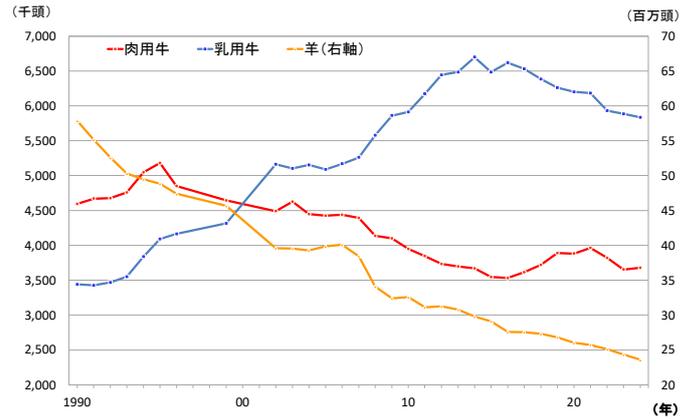
また、肉用牛として飼養される牛の約4分の1は、乳用種または交雑種（乳用種×肉用種）である。酪農部門から供給される乳用種のうち、経産牛は加工用牛肉（ひき材用）として、主に米国を中心に輸出されている。また雄子牛は、一部は肥育に回されるものの、多くが生後1カ月以内でと畜され、主にベビーフードやペットフードの原料に仕向けられる。

NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉の7割程度（製品重量ベース）が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受ける傾向にある。

ア 肉用牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業など、より収益性の高い部門への転換などにより、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりで増加している乳用牛と逆転した（図7）。その後も肉用牛飼養頭数の減少傾向は続き、17年以降は牛肉価格が好調であったことから増加に転じ、乳用牛とは反対に増加傾向で推移していたが、21年以降は再び減少となった。

図7 主要家畜の飼養頭数の推移



資料：Statistics NZ
注：各年6月末時点。

直近の肉用牛飼養頭数を見ると、23年は、生産者支払乳価の下落や生産コストの高騰から経産牛や未経産牛の淘汰が進められたことで減少した。24年はその反動で雌牛の保留傾向が強まったとみられ、同年6月末時点の肉用牛飼養頭数は、367万9000頭（前年比0.7%増）と前年をわずかに上回ったが、直近5年間の平均飼養頭数（380万頭）は下回った（表3）。

表3 肉用牛飼養頭数の推移

（単位：千頭）

| 区分／年 | 2019 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 肉用牛 | 3,890 | 3,883 | 3,965 | 3,821 | 3,654 | 3,679 |
| うち繁殖雌牛 | 1,105 | 1,067 | 1,067 | 1,021 | 989 | 994 |

資料：Statistics NZ
注：各年6月末時点。

イ 牛肉の需給動向

（ア）生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少傾向が続いていた。

2018/19年度には、中国をはじめとするアジアからの旺盛な需要とNZドルの下落により牛肉輸出価格が記録的な高値となったことで、わずかに増加した（表4）。その後も、高水準で推移する牛肉価格を追い風に、牛肉生産量は増加基調を維持し、20/21年度まで4年連続で増加した。21/22年度は、飼養頭数の減少などを背景にやや減少した。22/23年度は、為替相場が米ドルに対してNZドル安で推

移したことで輸出に有利に働き、と畜頭数が増加したことや、食肉処理施設の労働力不足が緩和したことなどから増加した。

23/24年度は、当初、米ドル安を受けて米国向けの牛肉輸出が堅調だったことで増加したものの、後半に生産者支払乳価が高水準で推移したことで、酪農部門での保留傾向が強まった結果、全体では69万4000トン（前年度比2.2%減）とわずかに減少した。

（イ）輸出動向

2023/24年度の牛肉輸出量は、牛肉生産量の減少に伴い、47万8000トン（同3.6%減）とやや減少した（表4）。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である米国向けは、同国内での干ばつの影響などからNZ産赤身肉の引き合いが強まり、18万1806トン（同9.2%増）とかなりの程度増加した。一方、輸出先第2位の中国向けは、同国の経済の低迷などを受け15万9571トン（同21.5%減）と大幅に減少した。

表4 牛肉需給の推移

| 区分／年度 | 2019/20 | 20/21 | 21/22 | 22/23 | 23/24 |
|-------------|---------|-------|-------|-------|-------|
| 成牛と畜頭数(千頭) | 2,688 | 2,852 | 2,705 | 2,732 | 2,641 |
| 子牛と畜頭数(千頭) | 1,903 | 1,887 | 1,873 | 1,958 | 1,913 |
| 牛肉生産量(千トン) | 682 | 729 | 693 | 709 | 694 |
| 子牛肉生産量(千トン) | 30 | 30 | 30 | 31 | 30 |
| 牛肉輸出量(千トン) | 464 | 504 | 480 | 496 | 478 |

資料：Statistics NZ、BLNZ「New season outlook 2024-202」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。



写真3 量販店販売状況（北島：オークランド）